

小学校における国際理解教育のテーマ別英語学習

坂本 ひとみ

要 旨

2011年度から必修となる小学校高学年における英語活動に向けて、『英語ノート』が全小学校に配布され、本年度からすでに年間35時間の授業体制で取り組んでいる学校が多数ある。そういう学校から今、求められているものは、『英語ノート』プラス α の活動、高学年の子どもたちの知的好奇心を刺激し、もっともっと学びたいという気持ちを呼び起こすような「楽しくて深い」英語活動である。しかし、これまで英語活動は年間11時間程度という学校が大半を占めていたのであるから、現場は大変な混乱を来している。本稿においては、全人教育としての英語授業という目標を念頭におきつつ、「生きる力」を育むための国際理解教育のテーマ別学習を取り入れた英語活動のあり方を示し、『英語ノート』の内容をより深いものにするための絵本や紙芝居、写真、ビデオ、ICTなどのメディアの活用についても述べることとする。小学校英語活動が目指すべき方向をもう一度検証したい。

I はじめに

小学校の外国語活動（ほとんどの場合、英語活動である）は、今まで「総合的な学習の時間」の枠内で、国際理解の柱のもとで行われている場合が多かった。が、2011年度から小学校高学年において週1時間程度の外国語活動が必修となると、その時間が「総合的な学習の時間」から独立し、国際理解教育の側面が薄れ、英語スキルの方へ偏る可能性が危惧される。しかし、子どもの外国語学習においては、外国語のスキルのみでなく、異文化を受容する姿勢や世界で起きていることをよりよく理解するための知識もバランスよく教えるべきである。教育者としては、小学校で何のために英語を教えるかという目的や意義をいつも念頭においておくべきであり、子どもたちが地球市民として生涯学び続ける人に成長していくための外国語学習である、ということをおぼろげに忘れてはならないであろう。

国際理解教育は、第二次世界大戦後、「ユネスコ憲章」の理念のもとに進められ、1974年に出された「国際教育勧告」では、「すべての科目、すべての教育のレベルにおいて国際理解教育は推進されるべきである」とうたわれている。ゆえに、英語教育においても、環境・人権・平和・異文化理解・未来といった視点を子どもたち一人一人の心に根付かせ、その学びの過程と結果において、彼らが集団として豊かに育っていくことを目指すべきである。

小学校において国際理解のテーマを学習の軸にすえた英語授業をするとき、絵本や紙芝居、写真、漫画、ビデオ、インターネットなどのメディアを使うことは、子どもたちの興味をかきたてるのに大

いに有効である。学習者の英語力と概念理解のレベルに応じた準備をすれば、一見難しく思われるテーマを取り上げても、英語授業は可能である。こういう視点を入れることで、文部科学省から配布されている『英語ノート』の各レッスンもより豊かな内容でメッセージ性のあるものにすることができる。美しい絵やインパクトのある写真は、子どもの心に長く記憶され、次の段階での学習に役立つ種まきの役目を果たすことになるであろう。

この論考においては、上にあげたようなメディアを使ってどのようなテーマ別英語授業が可能であるかということを実践例を含めて具体的に紹介していく。また、テーマ別学習においては、子どもたちが共に学び合う協働学習やプロジェクトワークの方法も用いられる。小学校英語の目標を再確認し、国際理解教育が目指すところ、育てたい子ども像から“逆算”して組み立てるような英語教育のカリキュラムを検討していきたいと思う。

II 小学校英語活動の意義

2008年3月に告示された小学校の新学習指導要領において、日本の教育史上、初めて全小学校に外国語活動が導入されることとなり、2009年4月からの移行措置を経て、2011年度からは完全実施されることとなった。外国語活動の目標として示された内容は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」（下線筆者）ということである。

中学校学習指導要領も2008年3月に告示され、外国語の目標としてあげられているのは次のようなことである。「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」

2009年3月に高校の学習指導要領が告示され、そこに掲げられている外国語の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」ということである。

新学習指導要領の特色の一つは、小・中・高を通した外国語教育の目標が「コミュニケーション能力」という言葉で一本につながっている点である。中・高の教科としての外国語（英語）の学習を後に控えた小学校は、コミュニケーション能力の土台作りの時期であり、外国語の力をつける前に、人と言葉でやりとりすることの楽しさを子どもたちに知ってもらい、中・高、または社会に出てからも外国語を学びたいと思う素地を養うということなのである。

また、小学校の外国語活動の目標にはあって、中学校のそれには入っていない文言として、「体験的に」ということがあり、小学校と中学校の大きな違いの一つはここにあるといえる。「体験的」というと、体を使った活動のように思われるかもしれないが、それはあくまで一部をさしているにすぎない。先生が一方向的に言語や文化についての知識を与えるのではなく、子どもたち自身が「言葉って面白い

な」とか「日本語や日本の文化とは違うな」ということに気がついたり、子どもたちが自分なりの方法で問題点などを解決しようとしたりする、心の動きが重要なのである。

コミュニケーションの楽しさを体験するということは、人とのかわり方がわからない子どもがふえていると言われる今日において、学校という場においてみんで学ぶことそのものの土台を作ることもなるであろう。コミュニケーションとは、単に自己発信や相手を理解することだけではなく、一方が発信したらもう一方がそれを受けて返し、お互いの理解がより深まり、影響を与えあって、自分のものでもなく相手のものでもない共通のものが生まれること、それを分かち合うこと（コミュニカタス）である。そのように共同で何かを作り上げていくには、相手の気持ちを慮り、言葉を大事に選びながら話し、相手をより深く知り、自分のこともよりよく理解してもらおうという姿勢が重要になる。相手をいたわること、思いやりを持つことは、自分とは異なる相手を受け入れることであり、これは人権教育、平和教育といった国際理解教育の根本でもある。国際理解という文字のなかに「国」という字があるせいか、どうしても「アメリカの行事」「韓国の料理」のように国別の文化を教えることと思われがちであるが、実は同じ国に住み、同じ言語を話していても、一人一人背負っているものが違うのであり、自分の隣にいる人を理解することが国際理解の第一歩だということをわかる必要がある。

小学校では、英語よりももっと日本語を学ばせるべきであるという根強い意見があるが、国語教育にとっても大事である子どもたちのコミュニケーション能力を養うのに、外国語活動は新たな場を作り出している。ほとんど人と言葉をかかわさなかった自閉症傾向のある子どもが、外国のゲストを招いていろいろな国のものを売買するというゲームをしたときに、言葉を発するようになったという報告もなされており、外国語のマジックといってもいいようなことが起きるのである。特別支援学級においては、通常は先生と児童が一对一で授業をしているのであるが、同じ時間に同じ題材と一緒に活動できるという点で、外国語活動の教育的価値が評価されている。外国語が新しい世界への扉となり、学習者の心を解放するという効果があり、外国語活動によって豊かになった子どもたちの表現力が、国語の音読の時間にも生きている、という報告も小学校の先生から上がっている。英語と国語は、子どもたちのコミュニケーション能力を育てる上で相乗効果をもたらすものであることを理解してもらいたい。

つまり、小学校の外国語活動は、心を育てる教育であり、「素地」というのは人格形成の素地であるともいえる。子どもたちの「生きる力」を育む全人教育としての外国語教育というとらえ方をした上で、具体的にどのような外国語活動が望ましいのかを考えていく必要があるであろう。

III 国際理解教育のテーマ別学習を取り入れた英語授業

グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル（GITC）は、国際理解教育のテーマ別学習を取り入れた英語授業を提唱した日本人の英語教員のグループであるが、彼らの残した業績は実に意義深いものである。このグループは1992年の発足以来、12年にわたって、英語教育を通じた国際理解教育の実践とそのための教材開発、教師支援をしてきた民間の団体で、2004年に解散した。現在

は、ESTEEM (Elementary School Thematic English Education Movement) という研究グループがこの仕事を引き継ぎ、全国の小学校の先生方に向けて研修を行っている。私もこのグループの一員であるが、小学校の高学年で英語が必修化される今、その英語活動の中身をどうすべきであるかを考えるとき、その年齢の子どもたちの成長段階にふさわしく、彼らの知的好奇心を刺激してさらなる学びへの欲求を生み出せるものとして、このテーマ別学習はまさに適切なものであると考えている。

テーマ別学習というのは、一つのテーマを切り口に様々な活動や問いかけが用意され、生徒の知的好奇心を刺激しながら進める学習であり、教師が知識・技術を生徒に一方向的に教え込むものではない。学習者一人一人がリソース・パーソンとして、自分が既に持っている知識や体験を他の学習者と共有し、学びの過程に貢献することが期待されており、教師と生徒が共に尊重し合いながら学びを深め広げていく。これを外国語教育に取り入れることは、「ホールランゲージ」という教育理念とも重なるものであり、言語教育において、言葉の背後にある文化・社会的側面を重視することにもつながっていく。

GITCが編著者である『新・英語で学ぼう 国際理解教育』という本には、国際理解教育の定義として、次のような文章がのっている。「多様な文化が存在し、人間も他の生き物も相互依存の関係で生きる世界で、地球市民としての責任を果たし、同時に自己の可能性を活かして豊かな人生を送るのに必要な生きる力(姿勢, 知識, 技能)を育てる。」これは、GITCの理念であり、イギリスで1980年代中ごろに始まったワールド・スタディーズの教育プログラムの考え方にに基づき、その定義を各人の生きる力にまでふくらませたものである。一人一人の子どもの幸せにつながる英語活動であるなら、何の意味もないし、学校という場が、自分の幸せだけでなく、人も幸せにしてあげる力をつけるところであるはずだということを思うとき、この国際理解教育の定義はまさに適切なものであると考える。教育が本来目指すところをもう一度見直し、子どもたちの全人格的な成長に貢献するような活動として外国語教育にも取り組んでいけば、いじめ、不登校、学習嫌い、自己否定感など、今、学校周辺で深刻になっている問題にも応えられる教育実践に発展させていくことができるであろう。

GITCは、国際理解教育の5つの分野からテーマを選び、言葉の学習に取り入れている。その5つとは、(1)自分自身や人々の自由と尊厳について知り、それを守るための人権教育、(2)個人の心から国際協力に至るまで、様々なレベルにおける平和探求のための平和教育、(3)持続可能な地球環境の大切さを認識し、具体的に行動するための環境教育、(4)文化や人種などの違いを超えて、共通の人間性を理解し合うための異文化間コミュニケーション、(5)各地の地理的、社会的特色を理解し、世界と自分自身の結びつきを学ぶための地域・国別研究である。

テーマ別学習は、教科横断型の学びであり、知識獲得よりも、学習者の態度形成のほうに重点が置かれるが、基礎知識の必要性は言うまでもなく重要であり、教科学習(教科別に進める学習 subject studies)との関連も生じてくる。したがって、ほぼすべての教科を教える小学校の担任教員にとっては、他の科目で子どもたちが学んだこととの連携を考えたり、校外学習で子どもたちが体験したことをうまく取り入れながら、英語授業のテーマを選び設定していくことが可能であろう。人権教育の具体的なテーマとしては、「人の五感」「子どもの人権」「性差別」「先住民の人々」「いろいろな食生活」、

平和教育の具体的なテーマとしては、「いじめはゆるさない」「チョコレート」「地雷」「難民」、環境教育の具体的なテーマとしては、「これはゴミ?」「恐竜」「熱帯雨林」「絶滅の危機に瀕する動物たち」、異文化間コミュニケーションの具体的なテーマとしては、「他の国から来た人々」「様々な言語」「色いろいろ」「人々の住居」、地域・国別研究の具体的なテーマとしては、「世界七大陸」「世界の海」「大韓民国」「季節」などがあげられる。

テーマ別学習で英語の授業づくりをするには、まず授業計画を立てることが必要である。テーマが決まったら、どのような方向性で授業の枠組みを作るか、テーマを展開するか、具体的にどのような活動を行うか、を組み立てていくことが最初のステップである。そのときにまず明確にすべきことは、そのテーマで子どもたちに何を学んでほしいのか、どんなことに気づいてほしいのかという、授業の「長期的なねらい」と「具体的目標」である。これがはっきりしていないと、個々の活動が断片的でつながりに欠けた、全体としてまとまりのない流れの感じられない授業に陥ってしまう。活動自体が楽しくても、その楽しさというのは生徒の集中力に依存する一過的なものである。次の活動への興味を高めたり意欲を持たせたりする力にはなっていない。生徒は何のためにこれをしているのか、ということに対して敏感である。目的がわからないような活動には、最初から興味を示してくれないし、受け身で消極的な取り組みしか期待できないであろう。

「長期的なねらい」とは、一つのテーマ教材によってすぐに達成されるという目標ではなく、長い目でとらえたねらいである。種まきをした植物がいつか芽を出して花を咲かせるように、テーマを通して考えたり気づいたりしたことが、時間をかけて一人一人の経験と学びの中に息づいてくるようにという教師の願いをこめて設定された目標ともいえるであろう。「具体的目標」は、あるテーマ学習が完結したときに、これだけのことがわかった、体験できたと生徒が具体的に感じられるような短期的な目標として設定するものである。

たとえば、「人の五感」というテーマを取り上げたとき、「長期的なねらい」は、「人は一人一人みな違っていることに気づき、五感の機能や働きにおける差異を個性として認め合う」ということがあげられ、「具体的目標」としては、「(1)五感の働きを理解する、(2)自分の五感の働きについて関心を持つ、(3)五感における差異を“障害”としてではなく、それぞれの“個性”として肯定的に受け入れる」ということを掲げることができるであろう。

次に、このテーマで生徒に何を学ばせたいかを考えるとき重要になるのが、国際理解教育において大事な3つのエレメントである「姿勢」「技能」「知識」であり、これを学びの基本とすることで目標がバランスのとれたものになる。(図1)

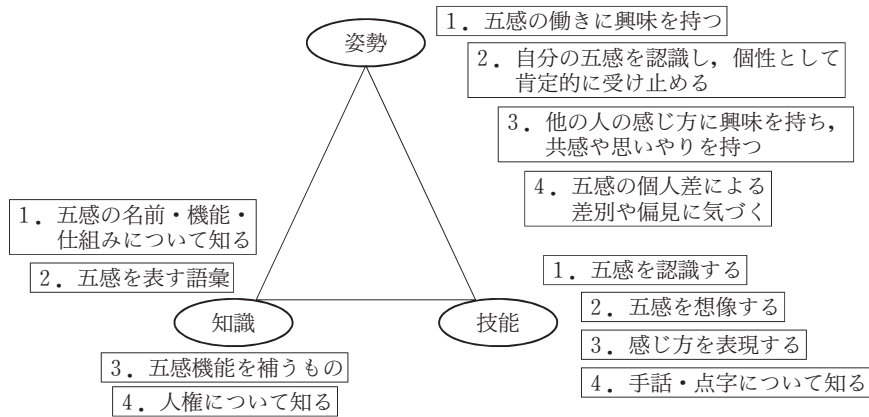


図1 『新・英語で学ぼう 国際理解教育』 グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル編著, p.60

「人の五感」というテーマで授業を展開するとき、どのようなアクティビティーができるかを紹介する。(A)言葉中心のアクティビティーとしては、①人の五感について、個人や文化による程度の違いをわかりやすいイラストで表した紙芝居を読み聞かせる。使われる英語表現は以下のようなものである。“I use my eyes to see. How far can you see?” “I use my ears to hear. When a dog barks, what do you hear?” ②五感に関連した絵カードを五感を表す文字(単語・文章)カードに対応させて並べる。③様々な手ざわりのものに触れて、その表現を導入する。“How does it feel?”と教師は語りかける。(B)身体を使ったアクティビティーとしては、①遠くにあるものが見えるか、だまし絵が何に見えるかなど皆の見え方を確かめる。また目隠しして、手ざわりでものを判断したり、嗅覚を確かめるゲームをする。テープに録音しておいた様々な音を聞かせてどう聞こえるかなど、それぞれの五感を確かめていく。“What is it?”という英語表現を使いながら、子どもに聞いていく。②様々な手ざわりのものを教室の中で探す。“Let’s find something soft/hard/smooth/rough!” ③目隠しをして実際に点字に触れてみる。(C)書き取り中心のアクティビティーとしては、①ワークシート“My Five Senses”に自分が五感を使ってすることが好きな事柄を書き込む。“I like to see _____.” “I like to hear _____.” ②ワークシート“How does it feel?”に手ざわりを表す言葉を書いたり、それらの手ざわりを感じるものを書いたりする。(D)テーマソングやチャンツを用いる。このテーマで伝えたい概念をやさしく歌っていて、子どもたちが歌詞の英語表現に楽しく親しんでいけるようなものを聞いたり歌ったりする。

このような学習においては、振り返り評価が重要となる。「長期的なねらい」と「具体的目標」をもとに、振り返り評価をするが、「ねらい」の成果は、一つのテーマ学習を終えたただけで完結するものではなく、多方面からのテーマ学習を積み重ねていってこそ見えてくるものであるから、1年間のカリキュラムを終えたときに、個々の生徒の成長を見つめるときの指針にする。各テーマの学習が終わった時点では、「具体的目標」に沿った形で、子どもたちに振り返りシートに感想を書いてもらい、どの程度興味を持ってそれぞれの学びに参加したか、テーマとの関わりの中で子どもたちが自分自身をど

うとらえているかを読み取ることができるであろう。振り返りの時間は、子どもたちが自分の内面を見つめ直し、自己尊重感を育むよい機会にもなるであろう。テーマ別学習の中で子どもが作り上げたリーフレットやポスターがあれば、それは完結した作品とみなすことができ、子どもは達成感を持つことができるであろうし、それに対して教師が所見を書いて渡せば、生徒への励まし、保護者への報告にもなる。「人の五感」のテーマ学習を終えたあとの振り返りシートとしては次のようなものを渡すことができる。(1)五感を使ってできることを書いてみよう。(2)五感を使っていろいろ試したことで、どんなことが楽しかったですか？驚くようなことがありましたか？(3)他の人についてどんなことがわかりましたか？(4)自分が一番よく使っていると思うのは五感のうちでどんな感覚でしょうか？(5)目の見えない人や耳の聞こえない人とお友達になったら、どんなことをしたいですか？

2011年度から外国語活動が必修になるが、それは「教科」の一つとして導入されるのではなく、「領域」という扱いである。そのため、指導要領の中で教科学習のような評定は求められてはいない。また、国際理解教育で育てようとする子どもたちの姿勢や、情感、価値観といったものは、評価の対象としてはなじまないといえるであろう。が、一つ一つの学びに「ねらい」や「目標」をたてることが大切であるように、学びの経過や結果を振り返ることも、なおざりにはできない。そうすることで、子どもたちがその学びを通じて得たものを実感し、自己を肯定的にとらえる、すなわち自己尊重感を高める機会を作ることができるのである。

IV メディアの有効活用

国際理解教育のテーマへの興味をかきたてたり、そのテーマについて生徒たちがすでに持っている知識を引き出し、学習の目標となる概念に気づかせるために、絵本や紙芝居の読み聞かせをすることは、子どもの英語学習者にテーマを導入するのに効果的である。注意すべきことは、学習者の英語の力と概念理解のレベルに応じた準備が必要だということである。(1)場面ごとのスクリプトが長過ぎないか、(2)全体の長さは適当か、(3)英語表現は自然であるか、もっとやさしい言い方ができないか、(4)絵とスクリプトがぴったり合っているか、そのバランスはよいか、(5)内容、言葉遣い、絵において、差別、偏見、固定概念、誤ったイメージがないか。以上のことに注意を払って適当な絵本や紙芝居を選び、必要であれば、事前に①日本語で通して読む、②登場人物や背景についての内容理解、③特定の言葉の聞き取りを促す課題を出す、④各場面のスクリプトを読み始める前に絵からわかることを質問し答えを引き出しておく、などの活動をする。英語絵本を用いる場合、pre-reading activities はじっくりと行い、その本を読んでもらったときに子どもの心が動くよう、英語の語彙の面でも内容の面でも耕しを十分にしておくことが大事である。英語が全部わかる必要はないのであり、子どもたちには、英語を聞いてわからないところがあっても、自分の想像力で補いながら、わからないことに耐える力をつけてやりたい。

絵本を言葉の学習に用いることはよくあることであるが、ここでは特に国際理解教育のための英語学習に絵本を使うことを強くすすめたい。ときに国際理解のテーマは抽象的で難しいと思われるものが含まれているが、絵本は視覚資料ともなり、テーマの導入を助け、子どもがそのテーマを自分に引

き付けて考えるきっかけをもたらしてくれる。異文化とつながり、他教科と関連する世界が、オリジナルなストーリーとともに子どもたちの目の前に開けていくのである。聞くこと自体は受け身のように見えるが、実は子どもの頭の中では、活発に想像力がはばたき、自分の既知の事柄と関連づけながら、理解しようとする能動的な知的作業が行われている。また、英語はあまり得意でない子どもでも、そのテーマが自分の好きなことであれば、絵本を読んだ後で、大いに自分の知っていることをクラスの皆に披露する場面が作れるであろう。絵本や紙芝居を読み聞かせしたあとで、教師と子ども、子ども同士の interaction, communication 活動にたっぷりと時間をかけたい。スペインのモンセラ・サルトが提唱した「読書へのアニメーション」というコミュニケーション活動は、このようなアクティビティーをするときのヒントをたくさん与えてくれる。どの子どもが述べる感想も、すべて受け入れられるクラスの雰囲気を作ることは、英語活動が楽しい時間となり、ひいてはそのようなクラスのあり方が平和教育の実践にもなるのである。アメリカのケーガン博士が提唱しているように、何も平和にかかわる教材をとりあげなくても、つねに授業のやり方が民主的で、力の弱い子にも発言の機会が平等に与えられるような状況は、平和教育に通じていくのである。

また、絵本の美しい絵や感動的なストーリーは、子どもの頭に鮮明に長く残り、心に種まきをした状況を作り出すことであろう。子どものときに、その物語のすべてが理解できなかったとしても、将来、また同じようなテーマに出会ったとき、自らそれについて調べ、学ぼうという意欲に通じていくかもしれない。読み聞かせによって本の面白さを味わった子どもは、自分一人で好きな本をみつけて読書をするようになっていくであろう。

私は、昨年、児童英語教育ゼミの学生の卒業制作として、英語絵本を作ることを指導した。何をとり上げるか、彼女と相談しているときに私が思いついたのは、自分の子どもが保育園に通っているころ、二人で一緒に読んで泣いた本であった。『かわいそうな象』という絵本で、第二次世界大戦中、上野動物園において殺されなければならなかった象と飼育員の物語である。彼女も小さい頃にこの本を読んだことを覚えており、家にはまだこの本があった。彼女に、重要な場面を15くらい選び出してもらい、絵コンテを作り、それぞれの場面に短い英語の文章をつけるという作業をしてもらった。論文を書くことは苦手な学生であったが、絵はとても上手であったので、彼女の multiple intelligences がうまく生かされたと思う。出来上がった作品は大変上出来で、彼女の後輩にあたるゼミの学生たちに読み聞かせをしたところ、皆が感動してくれた。これを流山市の小学校6年生に向けて読むための英語活動授業案を学生たちと考えることにした。もう一人絵のうまい学生が現れ、この絵本を紙芝居バージョンに仕上げしてくれた。夏休み前には、保育園実習で、この学生にこの紙芝居を読んでもらい、夏休み後は流山の小学生に向けて読んでもらうことになった。小学校の先生と打ち合わせをしたとき、『かわいそうな象』の物語は、平和教育の教材として、小学校2年生の道徳の時間に扱っていることを知った。学校の図書館にも置いてある本であり、英語活動で読み聞かせをしてもらったあとは、生徒一人一人にもう一度、この本を日本語で読んでもらうようよびかけることとした。

この紙芝居を用いて行う小学校6年生の英語活動の授業案は以下の通りである。この授業で扱う英語の素材としては、まず『英語ノート1』のLesson7にある“What's this?”を使って絵カードを用

いながら動物の名前を言うクイズから始める。次に Lesson4, Lesson5 に出てくる “I like~.” “Do you have ~?” を用いて、どんな動物が好きか、どんなペットを飼っているかのインタビューゲームやクラスサーベイを行う。物語を聞くのに必要な語彙として、『英語ノート 2』の “Let’s Enjoy 3” に出ている職業の言い方の中から “zookeeper” を、これも絵カードを用いながら導入する。物語の英語としては、『英語ノート 1』の Lesson2 にある表現から、象が空腹のときの表現として “I’m hungry.” を使う。内容面での耕しとしては、日本語版の『かわいそうな象』の本の表紙を見せて、“Do you know this story?” と問いかけ、読んだことのある子どもに知っていることを発表してもらう。読んだあとの活動としては、紙芝居の 1 枚 1 枚を小さな絵カードにして裏にマグネットをつけたものを作り、教師がもう一度英語でストーリーを読みながら、子どもたちに、場面ごとにそれを表している絵カードを選んでもらって黒板に貼りながら並べていき、物語の筋をもう一度皆でたどる。その後、「このとき象はどういう気持ちだったか?」「自分が飼育員であったら、象が食べ物をほしいと訴えたとき、どうしただろうか?」というコミュニケーション活動を展開する。それから、「戦争と平和」を対比しながら webbing の要領で、皆に連想することをどんどん出してもらいながら、黒板にマインドマップを作る。子ども一人一人が自分がイメージする「平和」の絵をポスターに作り上げ、それを show & tell の要領で、クラスの皆に見せながら、自分の考えを発表する。最後に授業の振り返りシートを書くという 2 時間の授業案である。

実践後の子どもたちの振り返りシートをまとめたところ、32名中、1名だけが「ふだんの英語活動のほうがよかった」というものであったが、ほかはすべてポジティブ評価であり、自由記述の欄には「戦争が起きたら人間だけでなく動物も殺されるのだということに気がついた」「この本を弟に読んであげたい」「知っているストーリーを英語で聞いたことで、また違った感じがした」「紙芝居をしてもらってうれしかった」などのコメントが見られた。

もう一つ、『英語ノート 1』 Lesson7 “What’s this?” 「クイズ大会をしよう」を扱いながら、国際理解教育のテーマ別学習に持っていくには、以下のような授業案が考えられる。このレッスンの最初の見開き 2 ページは、水族館の情景で海の生き物がたくさん出ているので、環境教育に使える絵本 *Where Are My Stripes?* の読み聞かせから入る。海がきれいでなくなったために、美しい魚の主人公の縞模様がどんどん失われていく物語である。海がきれいでないと、生き物たちが困る状況になる、それなら、子どもたち一人一人は何ができるかを考えてもらう。以前、『絶滅の危機に瀕する動物たち』のテーマ別学習を行ったとき、小学生の学習者が書いた振り返りのコメントは「ゴミをなるべく出さないように努力をする」「電気のスイッチをこまめに切る」というものであった。こういう意見が子どもたちから出てきたら、ゴミ問題についてのテーマ学習を子ども主体で発展させていく。使い捨てカメラやプラスチックのフォーク、割りばしなどの絵カードを用いて、“What’s this?” “What are these?” “Do you really need it (them)?” “Can you recycle it (them)?” と問いかけ、自分たちの生活を振り返らせながら英語を導入する。その後、グループでのプロジェクト学習のスタイルで進めていき、グループごとのテーマを子どもたちが決める。そして、一人一人が環境問題に関するクイズを一つ作ることをめざして調べ学習をし、まずはグループ内でそのクイズを互いに発表し合う。各

グループが一番いいと思うクイズを選び、それをクラス全体のクイズ大会に持っていく、という活動案である。

『英語ノート1』Lesson9は、“What would you like?”「ランチ・メニューを作ろう」という課であるが、高学年の生徒たちにふさわしい国際理解の内容を組み込むことができる。『コンビニ弁当16万キロの旅』という本が参考資料として使えるが、日本人の食卓によくのぼる食材がどんなに遠い外国から船や飛行機によって運ばれているか、そのときどれくらいのカソリンを使っているか、そして、それを生産している国の人々の生活がどんなに犠牲になっているか、というフードマイレージの問題、南北問題を生徒たちに考えてもらう活動ができる。また、食育という視点から、栄養素をバランスよく入れたメニューを考えることは、家庭科での学びが生かせるし、さまざまな国の文化がわかる食生活について取り上げれば、人権教育、平和教育にも発展させることができる。このような授業にしたときに、すすめたい絵本は *Yoko* という本である。ヨウコは、アメリカに住む日系の女の子であるが、登場人物は皆かわいい猫になっている。それぞれ出身国の文化を表したお弁当を学校に持ってきて昼に食べるのであるが、ヨウコのお寿司の弁当は、欧米系の子どもたちから奇異な目で見られている。この状況を改善したいと思った担任の教員は、International Food Day というイベントを企画し、それぞれの文化を背負ったランチを認め合うように計らうが、それでもまだヨウコのお寿司は受け入れてもらえない。が、食いしん坊の男の子が、つついヨウコのお寿司に手を伸ばしたところから、それが気に入る、二人は仲良くなる、というストーリーである。

『英語ノート2』Lesson2 “Aa Bb Cc”「いろいろな文字があることを知ろう」というレッスンには、最初の見開き2ページに、中国語、韓国語、タイ語、ロシア語などで書かれた動物の名前が載っている。が、ここのレッスンを実際に教えたある教員は、「ふーん、世界にはいろいろな文字があるんだね」ですませてしまったという報告を聞いた。子どもたちに、世界の様々な文字をもっと身近に感じてもらうにはどうしたらよいであろうか。まずは、担任教師がrole modelになることを提案したい。『英語ノート2』Lesson7で世界の時差を扱うとき、ある先生は自分の携帯電話を生徒たちに示しながら、「先生、オランダにお友達がいるんだけどね、今、電話しても大丈夫な時間かな?」と言って、このレッスンを始めた。この導入によって、ぐっとリアルな感じが生み出されたのであった。それと同じで、もしも日本語や英語の文字とはかなり異なる文字を使う友達が世界にいたなら、Lesson2の内容もぐっと子どもの身に引き寄せられた学習となるであろう。これは、私が自分の大学のゼミで行っている実践であるが、私がフォスターペアレントをしているエチオピアの9歳の女の子の暮らしをいつも紹介し、彼女が書いてくるアムハラ語の手紙を見せ、それが通訳の方によって英訳されたものも示し、学生に英語で返事を書いてもらうのだが、最初の出だしはお手本を真似ながら、実に難しいアムハラ文字で書くことになっている。外国の方が日本語のひらがなを学ぶときの難しさが身をもってわかる。GITCの教材には、アフリカの子どもたちの暮らしを紹介するいい紙芝居や絵本もたくさんそろっている。また、現代の日本社会も世界のさまざまな国から来た人々がふえているので、生徒たちの住む町のホームページを見て、どこの国の人かがふえているか、クイズ形式でランキングしてみるのもいいかもしれない。もちろん、そういう外国の方が英語活動に参加してくださり、その方から直接に、

その国の言葉や文字を習うことができればそれが一番よい。

『英語ノート2』Lesson7の世界の時差を扱うレッスンで子どもたちに見せたい絵本は、安野光雅氏が編集し、エリック・カールやレイモンド・ブリッグスはじめ世界の名だたるアーティストが参加してコラボレーションして作られた絵本 *All in a Day* である。大みそかから元日にかけての世界8カ国の様子を描いており、日付変更線のそばの無人島にいる人がSOSを発している、そこは1月1日の正午となっている。日本人の画家も参加しており、日本のお正月の情景が描かれている。最後、1月2日には、無人島でSOSを発している人も無事に救助される。

絵本や紙芝居だけでなく、世界の様々な状況を子どもたちに知らせていくのに、写真やビデオも取り入れたい。『英語ノート1』Lesson1は、「世界の『こんにちは』を知ろう」から始まるが、世界の7大陸の子どものペープサートを、ユニセフが出している写真集から作り、彼らが日本の子どもたちに向けて語りかける、というふうにするのもいいと思う。各国の言葉で「こんにちは」を発音するのは難しいが、『英語ノート』のデジタル版というものができ、コンピュータに入れて教室に持っていけば、そこをクリックするだけで音声が出て、その国の地図や代表的な建築物まで次々と画面に表れてくる。教師も生徒もICTを大いに活用して、世界を広げていくべき時代なのだ。ユニセフやプラン・ジャパンのホームページを子どもたちに見てもらい、彼らが自ら学ぶテーマ学習のきっかけにしてほしい。

写真を教材として使い、1枚の写真からわかること、感じることを、読み取れることを、学習者から引き出していく教授方法をフォトランゲージ(photo language)と呼ぶ。国際理解教育のための写真集としてすすめたいものは、ピーター・メンツェルの『地球家族』や『地球の食卓』である。彼が世界の多くの国々をめぐり歩き、素晴らしい写真集を作った。『地球家族』のほうは、各国のある一家が、家の中のものをすべてを外に出して見せてくれている。『地球の食卓』のほうは、各国のある一家が一週間分に食べる食材を並べて見せてくれている。これらを使ってどのような授業案を作れるかと知恵をしばるのを楽しむ力のある教師になるべきである。子どもたちには、写真を見てどれだけのことが読み取れるかというmedia literacyやcritical thinkingの力をつけてほしい。写真は現実を切り取ったものであるだけに、絵本とはまた違ったインパクトを子どもの心に与えることであろう。私が地雷の授業をするときには、子ども兵士となり、最前線で戦って地雷により片足を失ったカンボジアの少年の写真を導入の問題提起に用いている。また、クリス・ムーンがイギリスの母校の少年たちに向けて行った地雷の授業のビデオも見せている。流山の小学校で地雷について調べた5年生の子どもの結論が「自分は日本に生れてよかった」というものにとどまっておりに残念に思ったのだが、5年生の自分でも何かできるはず、何かアクションを起こせるはず、という学びの責任を一人一人の子どもが感じられるような授業を展開すべきであろう。そのためには、子どもの心が揺さぶられるような教材や教案を作り上げなくてははいけない。オーストラリアで行われている総合的な学習の時間は、この最後の部分、つまり、社会に向かって行動するということを中心としているという。私は、子どもたちに「そのための最初の一步は、自分が今日学んだことを、家族や他のクラスの友達に伝えること」と話しているが、世界の他の国の人の痛みを自分のことのように感じられる体験を積み重ねること、それは、学校で、友達が転ぶのを見て、「ああ、あの子は今、痛い思いをしたらろうな」という気持ちを

積み上げることと通じている。学校という教育現場はこういうところであるべきなのだ。英語を学ぶことは「人とつながる力」を育むためのものであることを、学校の校長、副校長、担任教諭、英語専科の日本人教員、外国人のALTみながともに理解したとき、その学校が育てたい子ども像の目標に合致した英語活動になるのではないだろうか。

V おわりに

以上のような論を展開すると、「国際理解教育の内容は、英語で教えるより日本語で教えたほうがいいのではないか？」という質問をしばしば受ける。そこで、もう一度、英語授業の中で国際理解教育を行うことの意義と利点を確認しておきたい。英語教育の目標は「世界の人々との相互理解を助けるコミュニケーション力をつけること」であり、それを達成するためには、国際理解教育で重視される「多様な価値を認める態度」や、「他者を尊重する姿勢」、また「自分や相手を理解するための知識や技能」、「多くの文化を背景とした教育内容」が不可欠である。そのため、国際理解教育の内容を英語授業に取り入れることの意義は大きいと考えられる。また、利点としては、子どもたちの英語（外国語）に対する好奇心や非日常性や異文化体験を楽しみにする気持ちを活かして、テーマへの興味や学習意欲を高められるということがある。もちろん、英語でも日本語でも、社会科でも理科でも、クラス運営においても、国際理解教育の実践は可能である。理想的には、あらゆる教育活動に国際理解教育の視点を持たせ、学んだことを暮らしの中で生かしていけるように支援することが望まれるであろう。そして、英語（外国語）活動が、小学校高学年において必修化されることが決定した今、単なる英会話や買い物ごっこ、ゲームばかりでなく、彼らの考える力、問題解決する力を伸ばすような題材を、英語活動においても提供すべきであろう。また、学びのスタイルとしては、教師が一方的に教え込む授業ではなく、子どもたちが興味を持って主体的に学んでいくプロジェクトワーク、協働学習、参加体験型学習を取り入れていくべきであろう。これは小学校だけの問題でなく、中学、高校、大学すべての教育機関において、なされなくてはいけない変革である。

日本の国際理解教育の背景にはユネスコの国際教育があるが、「ユネスコ憲章」の前文には、以下のような文章がある。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」(Since wars begin in the minds of men, it is in the minds of men that the defenses of peace must be constructed.)つまり、国際教育の目的は「一人一人の心に平和のとりでを築くこと」であり、すべての教育プログラムはこれをめざすべきなのである。

小学校の英語教育は、将来にわたって、子どもたちの外国語学習、異文化への態度を左右する大切な「出会いのプログラム」と言えるであろう。子どもの心に種をまき、スパイラルで国際理解のテーマに繰り返し出会う「小・中・高・大の連携カリキュラム」を作っていくことを、これからも提唱し続けていきたい。

参考文献

- 岡秀夫・金森強 (2007), 『小学校英語教育の進め方』 成美堂
- グローブ・インターナショナル・ティーチャーズ・サークル編著 (2005), 『新・英語で学ぼう国際理解教育』
ベルワークス
- 千葉保 (2005), 『コンビニ弁当16万キロの旅』 太郎次郎社エディタス
- 土屋由岐雄 (1970), 『かわいそうな象』 金の星社
- 東野裕子・高島英幸 (2007), 『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』 高陵社書店
- メンツェル, P. ・ダルージオ, F. (1994), 『地球家族』 TOTO 出版
- Anno, M. Briggs, R. Brooks, R. Carle, E. Calvi, G. Chengliang, Z. Dillon, L. Hayashi, A. Popov, N. (1986).
All in a Day. Philomel Books.
- Fried-Booth, D.(2002). *Project Work*. Oxford.
- Menzel,P. & D'Aluisio, F.(2005). *Hungry Planet*. Material World Books.
- Oe, P. (2006). *Where Are My Stripes?* R.I.C. Publications.
- Phillips, D.(2008). *Projects with Young Learners*. Oxford.
- Wells, R. (1998). *Yoko*. Hyperion Books.

